

---

# 史文語～あやぶみがたり～平安編～

西沢恩

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

史文語〜あやぶみがたり〜平安編〜

### 【Nコード】

N4836D

### 【作者名】

西沢恩

### 【あらすじ】

私の前には、歴史上の人物、物語の人物を思わせるような人々が次々に現れる。舞台は私の暮らす街、宇治。源氏の里に浮舟を思わす老女が現れた。

## 浮舟其の一

「この泥棒猫！」

何度その言葉を聞いただろうか、もう指では数えられない。泥棒猫、という、甲高い声で投げつけられた言葉が槍のごとく胸をえぐる。

なぜ

どうして

ただ

誰かを

好きになった

それだけなのに。

なぜ、このような目に遭わねばならないのか。モノクロームに霞んだ街を彷徨って、どのくらいの時間になるだろう。体も心から冷え、もう、歩く気力さえ残されていない。

それならば、いっそ、

老女は轟々たる早瀬の川へと引きつけられていった。

新春に浮き立つ空気を掻き分けながら、慣れた住宅街をすり抜ける。空気こそ冷たいが、風は穏やかで、冬將軍到来のこの時期とし

てはいたって過ごしやすいほうだった。こんな日々がいつも続けばいいのに、と、いつも思う。春、夏こそ盛りの時で、人気のシーズンだが、私はどうもこの冷たい空気の中たたずむ方が性に合っている。冷たい空気を自転車で切れば、千切れた風が頬をなで、家々は千切れた風に溶けていく。意外と冬のこの季節も、自転車で走るのは格好の季節である。冷たい空気は小説の題材に迷う私のイメージネーションをくすぐっては、過ぎ去っていく。

宇治のこの街は道が狭く、路地裏のような道が入り組んでいて、まるで迷路だ。どのぐらい狭いかと言ったら、東京や大阪にあるような大通りの歩道を二車線で普通に走っているのだ。そんな状況だから、自転車で走る側も器用にならざるを得ない。歩行者、自転車、自動車が肩を分けながら、狭い道をすり抜ける。器用でなければ、この街では生きていけない。そんな私も中学時代に歩き慣れた道を自転車で狭い道を掻き分けながら辿る。見慣れた茶畑は姿を消し、代わりに外国のカントリーかぶれの家が新しい迷路を成していた。中学校に通っていたほんの十年前、この街もめまぐるしく姿を変えていき、ただでさえ政治や経済の流れに疎い私はもう完全に取り残されそうだ。中学時代に塗られた自衛隊駐屯地の壁画も今は無惨にくすんでいる。

日の丸の掲げられた母校の門前で自転車を止めた。中学校を訪ねなくなってもう五年は経つだろうか。その間もこの中学校のたたずまいは変わっていない。しかし、校舎の見た目にこそ変わっていないが、当時の先生はもうほとんど転勤し、巷で見かけたと思ったらしわや白髪が増えている。建物の外観にこそ現れていないが、やはり確実に年月の流れは押し寄せていた。

十年も経てばそりや変わるよな。はあ、と小さくため息と一緒に吐き出そうとしたが、すんでのところ喉を震えなかった。年末年始休暇ということもあって、この学校には今は、誰もいない。誰もいないと知りながらも、ただ、校舎を眺めていたかった。それだけなのに、どうしてこうもセンチメンタルになるのだろう。十年とい

う卒業からの歳月が成せる、芸術なのかもしれない。

私は自転車にまたがった。去年の五月に買ったばかりだというのに、既に車体の緑は色褪せている。京都大学宇治キャンパスの塀を横切りながら、車の列をすり抜けていった。変わり映えのないアパートの群れにコンビニがポツンと真新しく建っていた。眼下に広がるバイパスには車がひしめいていて、動く気配一つ見せていない。大型スーパールの横をさらにすり抜ければ、左手に電車が走り抜けていた。踏切を越えて、昔からこの場所にたたずんでいるスーパーや真新しくやってきたスーパーとが競り合う中を通り過ぎれば、辺りに漂う源氏の匂い。この街は『源氏物語』の舞台として名高い地区だ。瀬戸内寂聴が「千年経っても物語の雰囲気が残っている。」と賞した宇治橋の景観。新興住宅街と呼ぶには歴史のある地区なのだろう。宇治橋から臨む朱い橋あかはいつの季節も早瀬の宇治川に映える。瀬戸内寂聴がこの街を愛でるのも、今なら少し、わかるかもしれない。何時しか私も、そんな年齢になっていた。

がたん、ごとん。JRの列車が鉄橋を通り過ぎていった。

宇治川に逆らって川沿いの奥に滑り込んでいく。この先を突き詰めれば、ダムがある。四十年以上の歳月に渡って、従来水害に苦しめられてきたこの街を大水から守っている。以前、このダムにかかると古い橋がきしむ上、車が平気で通るから、腰が抜けそうになったので、あれ以来一度もダムには近づいていない。昔よく、父と一緒に放流するところを間近から見たものだったが、今じゃそれも遠い思い出になっている。川沿いを少し進んだところに支流と本流がぶつかるポイントがあり、そこに、『源氏物語』の雰囲気を醸す、あの橋がかかっている。昔から、そこから下にそびえる激流を見下ろすのが好きだ。轟々と水の表情を刻一刻と変える様は引き込まれそうな美しさがある。そんな水の織り成す美しさに見入っていた。「人生とは、何だったのかしらね…。」しわがれた女性の声が水音を

かき消すような存在感を放った。はつと振り向くと、ベレー帽を深くかぶり、老眼鏡をつけた老女がいた。見たところ、腰はそれほど曲がってはいない。

「どいつもこいつも、嘘と綺麗事ばかり。こんな世の中であの人に  
出会えたことが何より大きかったのに…。ああ、こんなことなら私  
は…。」横でこんな意味深な言葉を呟かれたら、現代の若者として  
生きる私だって多かれ少なかれ気になる。とても独り言には聞こえ  
ず、むしろ、誰かに聞いてもらいたいかのような口だ。自分の三倍  
から四倍くらい長い人生を送ってきたと思われる女性だから、到底  
私には想像もつかない世界が、そこに広がっているのかもしれない。  
私はためらう喉に鞭を打って、言の葉を紡いだ。

「ど、どうか、したんですか。」

老女はまじまじと私を見た。爬虫類のようにこけた目のまま、私  
から目を逸らさない。顔は疲労の色が色濃く皺を際立てている。そ  
の不気味な恐ろしさから、妖怪のようにも見えた。

「ごくり、と、喉が鳴った。」

老女の目から堰を切ったように涙が溢れ、

突然、わっと泣き出した。

私は、慌てふためいた。老人が泣くのを見るのは、これが生まれ  
て初めてだった。こういう時に限って何時も、周囲の目は辛いもの  
がある。誰かこの状況を何とかして欲しい。そんな私の訴えは道行  
く人々には伝わらない。

「あ、あの、落ち着いてください。どうなされたのですか。」

「私は…この年にもなっ…男性と、性を交わす仲間になりました。」

男とセックス。このことだけで頭の中は大地震に揺れ、雷が鳴り

響き、大雨、洪水。何もかもが崩れ、洗い流されてしまった。今の私の頭の中には荒れた大地が閑散と広がるだけで、もうすっかり何も考えられない。私の中にあつた知識は突然の災害に耐え切れなかった。

「な、何を、また。」

「先日、夫に先立たれ、私は悲しみの底に暮れました。そこから立ち直りきれぬまま、すっかり老いこけてしまつて。そして先日、資産家の男性と出会つたのです…。」

懺悔でもするかのような口の利き方だ。私の喉が再び、ごくりと鳴つた。自分の人生をもつてしてでもこの老女の人生の断片を垣間見るのが精一杯なのは百も承知のだが、妙な緊張に襲われた。ああ、この緊張感をなんと形容したらよいのだろう。どうしてこういう時に限つて、私の語彙は乏しいのか、何時も口惜しくて仕方ない。

## 浮舟其の二

老女の話によるとこうである。名は大谷頼子と言い、夫は一年前、七十五歳で他界した。その悲しみを拭いたくて、日々夫を思いながら過ごしていたある日、地元資産家の男と出会ったという。地元では名の通った栗生財団の会長で、独身。名を栗生勇三といった。出逢ったきっかけはJR宇治駅の前を通ろうとした時、大理石に足を滑らせた。あわや転倒、危機一髪というところを間一髪で抱きとめて、救出した、その相手こそ栗生だった。

「あつ。」

老女の足が絡み、あわや前方に転ぶところだった。七十を過ぎたのだから、尻餅一つでどうなるかわかったものじゃない。転ぶと確信し、きつと目を瞑った瞬間、

「大丈夫ですか。」

ああ、ここは夢か幻か。いつまで経っても地面にぶつかる感触がない。はつと目を開けると、男性の手が老女の体を抱きとめていた。男は身長百七十センチに届くか届かないくらいで、少し痩せていた。品のよいスーツに、顔はきちんとひげを剃っている。その清廉とした印象はとても若く見えるが、白髪と目元に刻まれた皺から五十代半ばぐらいに見えた。

「あ、はい。」

「この辺りは滑りやすいですからね。気をつけたほうがいいですよ。」

「

「あ、ありがとうございます。何とお礼を言っているのか。」

「気にすることありませんよ。一応、こういう者ですが。」

と、名刺を差し出す。互いに警戒しながらすれ違うのが普通となつたこの時代には珍しい、オープンな男だった。渡された一枚の名刺にはこう書かれていた。

(財) 栗生財団 会長

栗生勇二

「くりゆうゆうぞう？栗生財団って、あの有名な。」

「ええ。中小工場関係の融資や支援を中心にやっています。」

「そうですか。私は大谷です。大谷頼子。」

「大谷さん、ですか。またどこかでお会いできるといいですね。」

栗生は急いでいたのか、その場を立ち去ろうとした。その刹那、

「あ、あの。」

「何か。」

「いえ、失礼しました。」

頼子は栗生に気づかれないうちと、小さくため息をついた。これが二人の出会いだという。

「栗生さんと出逢って、それから、どうなったんですか。」

私は問うた。頼子は小さくため息をついた。私は早く続きを知りたい苛々と必死で闘いながら、静かに続きを待った。

「それから何度かお話をして、何度か逢瀬を重ねました。本当に素敵な方で。」

頼子はしみじみ空を眺めた。語尾のほうは震えていた。世にいうところの紳士ジェントルマンなのだろう。私はふっと、空を見上げ、栗生のイメージを描いた。

夫の喪が明けないうちから、栗生と逢瀬を重ね、互いに惹かれていった。頼子の服装は派手になり、久しくしていなかった化粧もするようになった。しばらくはなんてことのない普通のデートだった。喫茶店でコーヒーを飲んだり、宇治の里を一緒に歩いて、桜を楽しんだり。

「栗生さんは桜が好きなのですね。」

「京の市中の桜は人が多すぎてね。この宇治の桜もまたいいもので

すよ。」

とにこやかな栗生。宇治の早瀬の轟音にしばし苛まされながらも、毎年美しく咲く桜。それを眺めながらのコーヒーは格別なものだったという。若くて、仕事をしていれば尚更だろうが、老人というのは時間にゆとりがあるように、私には感じられた。喫茶店で桜を見ながらのデートとはなかなか粋なものではないか。そう考えるだけで、今年の桜は違う境地で眺められそうな気さえした。

「ご主人、お亡くなりになられたのですか。」

「はい、先日。」

「そうですね、それはお気の毒に。とても、仲がよろしかったようですね。」

「はい。」

頼子には、そう答えることしかできなかった。栗生に頼子がどう見えただろう。この時点から少しずつ、いとおしく見えたのだろうか。視線が切なく絡み合う。

「店を出たら、宇治川でも眺めますか。」

「そうですね。」

外に出ると、満開の桜に桜吹雪が、空気を桃色に染めていた。蒼い宇治川によく映えている。

「きれい、ですね。」

「ここから見る桜はいつも綺麗ですよ。」

そう答える栗生の横顔はいつ見ても神秘的だった。逢瀬や付き合いを重ねるうちに、その神秘性はますます深められていく。頼子自身もこんなにも人をいとおしいと思ったこと、五十年以来なかった。栗生の存在は夫のいない心を埋めていく。魅せられた頼子は思わず漏らした。

「あなたは不思議な方ですね。」

「そうですね。あなたのほうこそ。」

それとなく寄り添った二つの手。二人の手が初めて絡まった。

そして、二人はそっと寄り添った。春風に温もった身体が心地よ

い。こんな心地は五十年と久しかった。夫とこうしたことはないわけではもちろんなかったが、随分遠い昔に感じられた。

「頼子さん。」

「はい。」

「桜、きれいですよ。」

「ええ。」

金箔をちりばめたように輝く蒼い宇治川に、朱い橋、生命いのち萌ゆる翠の山々。雲ひとつない水色の空に映える桜、花吹雪。そこはまさに、二人だけの穢れなき世界だった。

出会ってから半年以上経った夜の晩のこと。ついに、しわがれた唇が、裸の胸が、体が、黒い蜜の中重なり合う。それだけで私の想像を遙かに超えた境地だった。いけない、あぶない、禁断の漆黒くろ。想像するだけで体中を電気椅子も顔負けの、凄まじい電撃が駆け巡る。新春早々、このような境地を味わうことになるとは、正直、思ってもいないことだった。なんと奔放で大胆な光景だろう！私の頭は、体は、突然の電撃に麻痺してしまった。

「もちろん先立たれた夫のことも忘れられるはずがありません。でも私は、勇三さんの想いを嬉しく思いました。このような身分でこのようなことを、とは、思いながらも、次第に、次第にそういったことを思っていたことすら、忘れていきました。」

老人同士と、侮ることはできないものだ。愛を交わすことは何時の年齢になってもできるものである。新春早々得た教訓がこれというのも、若い私には新鮮なことなのかもしれない。

だが、それからまもなく、悲劇が起こった。

栗生は頼子の息子が運転する車に撥ねられ、死亡した。

そのため財団のほうも大パニックになった。これに怒った家族が頼子に、息子に多額の慰謝料を請求し、裁判でもその慰謝料請求が

通ったのだった。

「この泥棒猫！すべてあんたのせいよ！」

頼子にそれをぶつけるのはいささか筋違いに映るかもしれない。そうだとこの頼子は、その理不尽な罵声を何度浴びたかわからなかった。頼子はそれを支払うために、夫と住み慣れた家をも売り払うことになったのだった。慰謝料は何とか支払い、息子に家に同居するよう声をかけられているが、住み心地は最悪だった。あまつさえ夫の遺影も居心地悪そうにたたずんでいる。遺影に映る夫は、こんな頼子と息子をどう見ているだろうか。

以前ならこんなこと、想像すらしていなかった。夫以外の誰かを愛すること。その人が息子の手によって、死に至ること。別々の家で、それほど遠く離れることなく、頻繁に会ったりしていた。お互いごく当たり前の生活を営んでいた。それが、たった一人の男性の存在でこんなにも激しく、哀しいまでの変貌を遂げてしまった。息子との関係は悪化し、口すら利かない日が何ヶ月も続いた。家を売り払った今となっては息子の家に暮らすのが精一杯だったが、勇三を死なせた息子がどうしようもなく悲しくて、やり場がない。

ひとり淋しく、路地を放浪しながら感じたのは、すれ違う度に冷ややかに刺さる世間の人々の目。楽しそうに笑うカップルも、親子連れも、頼子の目には影にしか映らない。誰一人として、頼子に優しく声をかけよう者など、一人もいない。街頭のニュースに耳を傾ければ、食品の偽造やら不正やら、そんなニュースばかり。何もかもが煩わしく、哀しい。まさに、憂き世の海を漂う小舟、浮舟。彼女はまさに浮舟だ。

「私は勇三さんに惹かれていました。夫には申し訳ないとは思いつつも、勇三さんの想いは嬉しく、幸せだったのに、それも長くは続かなかった。ああ、なんでこんなことになったのでしょうか。」

そう言い残すと、老女は橋から早瀬の水底に身を差し出していた。

その間のことはほんの一瞬で、私には止めさせる、と、考える間さえなかった。状況が飲み込めたときには既に、水しぶきの中からベレー帽がちゃぶちゃぶと漂っていた。周囲から、女性の黄色い悲鳴と、警察だ！救急車も呼べ！と、声高に叫ぶ男の声が幾重にも、ぐちやくちやくと交じり合う不協和音。

不意に私の脳裏にある女性の姿が映った。紫を上重ねた十二単に白い肌、どこまでも続きそうな黒髪の女が橋から宇治川を物憂いながら臨んでいた。

ああ、あなたは、浮舟なのか。誰なんだ。

辺りに、霧が立ち込めた。

「どいてください。邪魔ですよ。」と、二十代後半と思われる警察官が私を掻き分けていた。我にかえると、宇治川にはいくつもの救命ボートが何艘も浮かび、頼子を探していた。辺りにはいつの間にか人だかりができていて、私にはあの人の話と今のこの展開になるまでの間の記憶がなかなか繋がらなかった。

「あ、失礼ですが、さつき伺った時に聞いたんですけど、あなた、飛び込んだお婆さんと話をしていたそうですね。」

「は、はい。」

「その時に何かお婆さんに変わったこととかなかったですか。」  
いつの間私があの人との関係者になったんだろうか。ただ、ついさつき知り合って、話を聞いた。それだけだった。

「さあ、随分と大きな独り言だったから、気になって訳を聞いただけで、変わった様子とかどうこうって言われても、どうとも言えません。それに、飛び込むまでの間は一瞬だったので。」

と、だけ答えておいた。

「そうですか。これは失礼しました。」

警察官は一応非礼を詫びたが、とても本心から詫びているように

は聞こえなかった。あの人は、あの女性は。早瀬の宇治川は何も答えず、ただ轟々とあらゆる憂きを飲み込みそんな水音をけたたましく立てていた。

### 浮舟其の三

頼子は二十分ほどして、一キロ下ったところで救出され、病院に搬送された。どこの病院に搬送されたとまではわからなかったが、何も知らない衆生（ひと）はこの記事に安堵するだろう。しかし、私はあの人が、どんな風景を見ているのか、どんな想いをしていいのか、そればかりが気がかりだった。ただ、愛を重ねた。それだけで悲劇に翻弄された人。あの人にいったい、何の罪があったのだろうか。法律上、死別しているのだから、他の人と愛を交わしたところで基本的には問題はないはずだ。また、女の姿が脳裏をよぎる。前と同じ、紫の十二単に、果てなく長い黒髪、煌びやかな扇に隠した白い顔。男の姿も見えた。橙の束帯に、黒い烏帽子、そして女と同じ白い顔。男の名はニオウノミヤと言っていた。ニオウノミヤ、におうのみや、匂宮！『源氏物語』宇治十帖の匂宮だ。女の名はうきふね。「浮舟」と、名乗っている。憂き世を彷徨う小さな小舟に自らを喩えた浮舟の名。薫と偽って交わされた契りはやがて浮舟を蝕んでいく。苦悩の果てに、浮舟は宇治川に身を投げようと失踪する。私が見たのは、行方をくらました浮舟の姿だった。私の脳裏を掠めたのは、現場のそばにある近くの博物館で見た、あの浮舟の姿だった。紫を基調とした十二単、白い顔に生える細い眉、地面をも這う黒髪。大胆で、奔放な、愛という名の、運命という名の嵐に溺れ、世を憐んだその様はまさに、頼子とぴたりと重なる。

浮舟よ、あなたと同じような境遇の彼女が、千年後のこの宇治の里にいる。あなたには彼女がどう映るのか。私は、不意に聞いてみたくなった。

辺りは既に真っ暗な闇に支配されていた。ガレージを照らす無機質なオレンジのライト。私はただいま、も言わず、家の鍵を開け、中に入り、カバンをどさっと置く。

「あら、お帰り。」

家の台所では母が鍋物の支度をしていた。

「えっ、もうそんな時間？」

時計を見ると既に七時は軽く回っていた。母は病院でパートの看護師をしているので、夕飯はいつも八時頃になる。再び視線を台所に向ければ、電磁コンロに据えられた大きな鍋からふつつつと湯気が立っている。今日の夕飯はどうやら鍋らしい。調理場には白菜、ねぎ、うどん、水菜、豆腐、薄切り豚肉のかたまりが行儀よく鍋用のザルに盛り付けられている。この時期の夕飯では定番だ。

「うーん、ちよつと豆板醤入れすぎたかしらねえ…。」

今夜は口の中がバツクドラフト状態になること間違いなし。調理中の母に

「洗濯、干しといたよ、残り湯で。」

「あ、ありがと！助かるわ！」

の、いつもの返事。言いはしないが、この家の洗濯物はホントにすぐ溜まる。冬場は決して乾きはいわけじゃないんだから、もう少し考えて出して欲しい。母にそう目で訴えて、私は二階の自分の部屋に上がり、パソコンを立ち上げた。インターネットに映る、数々のゲームから派生した短いファンクション、ポップなイラストが大好きで、いつも眺めてしまう。学生時代はこれを眺めるだけで一日時間を潰したこともあったっけ。最初はインターネットに夢中になっていたけど、そのうちいつしか、インターネットで出会った小説に私ははまっていった。インターネットはツールに過ぎない。だが私にとっては欠かせない。いつしか私はこうした短いファンクションがきっかけではあったけど、徐々に物語の世界へとハマっていったのだった。ファンクションと言えども表現力はなかなか。引き込まれてしまう。

家を建て替える都合上、私は去年の一月末から六月の頭にかけて、古いマンションで暮らしていた。傷んで波打つ畳に隙間風、くすんだ壁に部屋全体から漂ってくる強い生活臭。妹や母には不評だった

が、私はまんざらでもなかった。これでネットさえあれば、それこそ暮らしていけそうだった。ただ我が家の家具、家電がこのマンションには合わず、常に不協和音を奏でている、奇妙な状態だった。この家の唯一の不満といえば、インターネットが使えないこと。私はネットができない不便さに耐えかねて、すぐ近くのネットカフェに足繁く出入りしていた。「オタクの隠れ家」と言うネットカフェは至極快適だった。そんな私のネット中毒はけっこう重症。韓国の誰かさんみたいに二十時間もネットして死にたくはないが、ネットカフェに出入りしていたのは秘密基地みたいで、楽しかった。

家が完成し、ネットカフェに行くことはほとんどなくなったけど、今もネット小説ブームは衰えていない。今日読んでるファンフィクションはいつだって私の目を楽しませる。でも、書くならやっぱりオリジナルがいいよな。というのが、私のポリシー。でもまだ、書くに至らない。

あ

今日会った、あの女性、頼子って、言う名前の人だったっけ。

あの人は、どうなっただろう。ふと、気になり、宙を眺めた。真新しい青白の壁が私の視界を染める。聞けば頼子は一キロ流されたが、何とか助かって、どこかの病院に搬送されたらしい。

はあ、と、小さくため息をついた。

プーッ

家の内線で妹が私を呼んだ。部屋にまで届く無機質な音。まったく空気を読まないヤツ。

「はいはい、今降りますって。」

声に少し怒気を混ぜながら、いつもの調子で階段を駆け下りた。テーブルの上に鍋がもうもうと湯気を立て、白い食器が並べられていくのを呆然と見ていた。

「何ボーツとしてんの？はよ手伝って！」

耳にキンキン響く中学生の妹の声に二つ返事しつつも、私は箸を並べ、食卓についた。テレビからはくだらないバラエティが流れている。十数年前、この家にはなかった落ち着きがすっかり取り戻されていた。いつからこんな生活が当たり前になったのだろうか。十年前には考えられなかった、落ち着いた暮らし。

それでも、今は、白菜を口に運ぶことだけしかできなかった。

その晩、ベッドの中、私の頭の中を頼子のがめまぐるしく駆け巡った。今日一日、まるで激流を下ったかのような一日だった。轟々と流れる宇治川に身を投げた年老いた女。恋した男が息子の手により殺された。私の理解を超えた運命の、性質の悪すぎる悪戯。頼子に何一つ、慰めの言葉もかけてやれなかった。ただ、目の前で起こった出来事の凄まじい激流に呑みこまれ、私の喉は何ももつてしても震えなくなっていた。私は、あの人に、何をしてやれただろうか。浮舟のごとく、世の全てを憂う女性。世の悲しみと無常に翻弄された女性。私はただ、無力だった。

## 浮舟其の四

いつの間にか一月も下旬にさしかかろうとしていた。私は武川病院に入院している父の見舞いに向かった。生と死の絡み合う独特の雰囲気と、苦い薬品の匂いが子供の頃から苦手だった。私の父は十年前、医療事故に遭い、脳に重大な後遺症を残し、十年以上も病院のベッドに寝たきりとなっている。父のいない生活、奪われた日常、あれ以来、必死で母を支えようと自分を律し続けてきたが、皮肉にも心が崩壊し、鬱病になりかけた。複雑骨折した心の痛みに耐えながら、母を支えようとしたのが仇となったのか、ある時、気づくと私は手首を切るうと包丁を手首に当てていた。あれから何とかしよと自分で精神科医の厄介になつていたが、抗鬱剤のコンスタンを処方されただけだった。リストカットに対する欲望はそれで消えたものの、心は依然としてポキンと真つ二つに折れたままだった。人間何にでも慣れるというが、やがては心の痛みすら感じなくなっていた。そんなある日のこと、母親が私の事情にも対応した別の精神科医を探していた。父親のことか、と、思っていたら、私の治療のためだった。母を支えようとしてきた私になぜ、その母の手を煩わせてしまうのだろう。ただただ、情けなかった。そんな、これ以上ないほどの苦い傷跡が、私には、この病院の薬の臭いには、今なお存在する。

父は相変わらず、しまりのない顔をして寝ているだけだった。十年前のまま、時が止まってしまったかのように動かない父。ただ、薄くなつていく髪だけが、年月をかるうじて留めていた。亡くなる一年前の年老いた母に仕打ちとも言えるような脳障害の現実。脳障害の父を最期まで案じながら亡くなつていった父の母、私の祖母。私の父のことも案じながら、知らず知らずのうちに精神を病んでしまった私のことまで気にかける母。母親と言う存在は私には今だ

って不可解な存在だ。いつか、自分も子どもを産んだら、少しは母の境地が理解できるのだろうか。

ここにくると、いろんなことがいつも脳裏をよぎってしまう。そう言われた中で頼子は、あの人も聞けば息子がいる。私の知る限りの私の知っている母親像とは、随分かけ離れていたように思えた。あの人の息子も、罪の意識に苛まれながら、私のように必死で母を支えようとしたのだろうか。いや、今でも、そうし続けているのだろうか。

「この前宇治川に飛び込んだおばあさん、たしか山ノ下病院に運ばれたそうですよね。」

聞こえてきたのは看護婦の何気ない会話。その会話に聞き耳を立てた刹那、私には、患者の呼吸音も、苦い薬の臭いも届いていなかった。宇治川に飛び込んだおばあさん、というのは、言うまでもなく頼子、あの人のことだろう。私はさらに聞き耳を立て、看護婦の話す一言一句に注意深く耳を傾けた。

「ああ、あの宇治川に飛び込んだ？確か、大谷頼子さん、だったっけ？息子さんがお友達を轢いてしまったとか。」

「そうそう。名前は正確には覚えてないけど、確かそんな名前でも、助かって何よりよね。」

「そうね。」

それだけの短い会話で、看護婦達は仕事に戻っていった。あの人は山ノ下病院にいるのか。安心と疑念とが複雑に交じり合う。私はあの人がどこで、どうしているのか、今すぐにでも知りたい衝動に駆られた。

あの人は。

私を恨んでいるだろうか。

恨んでいるなら、恨んでいると言って。

それが、

貴女の、

心を救うと言うのなら。

君の悪い癖だ、と、旧友は苦言するかもしれないが。  
ともだち

私は病院を後にし、山ノ下病院に自転車を向け、風を切った。車の列も、聳え立つ団地も今は、目に入ることなく、スピードを上げていく。山ノ下病院ならここから目と鼻の先だ。私の頭はあの人のことだけで満たされていた。母が見たら、何をやっているんだ、と、こちらも苦言しそうだが、それも今はかまわなかった。私はただ、坂道を駆け上がり、病院の自動ドアを開ききる前にすり抜けた。ドアをすり抜けた左手にあつた総合受付で、

「すみません、大谷頼子さんの見舞いに来たものですが、病室はどこらでしようか。」

と、尋ねた。

「大谷頼子さんですね、少々お待ちください。」受付の若い女性事務員は頼子の病室を調べ始めた。五分ほどして、

「お待たせしました。大谷頼子さんは五階二号室です。」  
と、丁寧に返した。

「そうですか。ありがとうございました。」

軽く一礼し、五階へエレベーターで上った。案内図を頼りに二号室を探した。この病院は父の入院している病院と違って薬品の臭いが抑えられていて、幾分居心地が良い。突き当たり手前が二号室だ。わずかに開けられたドアの隙間から、老女のすすり泣きが聞こえた。

あの日と同じ光景が、そこに広がっていた。

頼子は病室で泣き崩れていた。

あの日と同じ、あの人が、そこにいた。

覗き見とは何時の時代も趣味の悪いものだが、そんなこと今の私

には言つてられなかつた。息を殺し、部屋の中の様子を伺う。頼子は人が覗いていることにも気づかず、おんおんと泣いていた。担当している看護婦と医者が困り果てている様子が覗いているだけでも伺い知れた。覗いているこの瞬間は、怖いような、楽しいような、ジェットコースターでも味わえないスリルだった。

「誰かいるのかい。」

ドアの辺りから人の気配を感じ取つたらしい医者がこちらに視線を向けた。まずい、視線が合つてしまった。医者がこちらに近寄ってくる。私の背中を冷や汗が一筋、たらりと、通つた。今まで社会の規範に従うことだけを考へてきた私、それから逸脱することを許すまじとしてきた私だった。だが、今の私は完全にそれから逸脱している。社会から逸脱するのは、実はとっても簡単なことだったのだ。私はきつ、と目を瞑つた。

恐る恐る目を開けてみると、ドアを開けた医者と視線がかち合つた。髪を五分に分けた、四十前後の医者だった。

「お見舞いの方ですか。」

「あ、はい、福沢です。福沢亜弓。」

勢いあまつて名を名乗る私。傍から見れば、本当にどうかしている。しかし、医者はそのなにかまう様子はなかつた。

「福沢さん、ですか。お見舞いでしたらどうぞ。面会時間は夜の八時までですから。」

返つてきたのはごく普通の事務的な返事。拍子抜けしてしまつた。ほとんど付き合ひもないのに手ぶらで見舞いに来るとは、なんとも格好つかないが、すぐに切り替え、私はすすり泣く頼子のもとへと足音を殺しながら近寄つた。

「あ、あの。」

声をかけると、頼子は泣くのを止め、私をまじまじと見ていた。

青い入院着を来た頼子の腕は骨だけしかなくらいに細く、顔は前に会つた時よりかは幾分ふくよかになつたものの、やはりやせこけていた。

「さつきからこの調子なんですよ。あなた、頼子さんとお知り合いですか。」

「え、ええ、そうです、ね。」

救いの手とでも言わんばかりの若い看護婦の質問に私は歯切れ悪く答えた。

「家を売り払ったり、いろいろ苦労したのでしょね。」

と、表面的に同情するような口を利きながら私に会釈し、看護婦は退室した。なんだか頼子がますます気の毒に見えて仕方がない。一体彼女が何をしようのか。頼子の爬虫類のような目とかち合ったが、頼子は何も言わない。一体何の報いで彼女はこんな形で愛する人を二人も失わなければならなかったのか。頼子の爬虫類のような目とかち合っていたが、頼子は何も言わない。とはいえ、じつと私を見ている中、私はなんと声をかければよいものか、思案に暮れていた。光源氏なら、薫なら、匂宮なら、なんと切り出すだろう。紫式部なら、清少納言なら、どんな歌にするだろう。私の脳内はめまぐるしく駆け巡っていくが、一向に適当な言葉の一つも浮かんでこない。

その上、頼子はただ、私を見ているだけで何も言わない。よく見れば、その目は虚ろで、私が見えているのかさえ、定かではないようだ。輝きを失った黒水晶、虚しく移る殺風景な病室の白い箱。私は今、どのように映っているのだろうか。頼子の目には言葉も感情もない。

「あ、あの、私がかかりますか。」

私は私を指で差しながら、ゆっくり尋ねた。しかし、頼子は何も答えない。聞こえていないのか、と、ため息一つ、小さく零すと、

「お、お嬢さん、なぜここに。」

と、口を開いた。壊れた一昔前のロボットのよう。

「このご時世、変な話かもしれないですけど、頼子さんが救出されたのが新聞に載ってて、たまたま別の病院でここに入院していると聞いたんですよ。それで、少し、気になったので、来ました。」

「そう。」

感動の薄い返事だった。私はまたため息を一つ零した。そんなにため息つくと、幸せが逃げるよ、と、また苦言されそうだったが、仕方ないだろう、この状況。

「それで、その、少しは落ち着きましたか。」

「落ち着いたというよりは、今まで何をそんなに執着していたのだろうか、と、急に思えてきてしまったの。あの人のこと、夫のことと走馬灯のように夢の中に出てきて、疲れて目が覚めて、無性に悲しくて仕方なくて、それが過ぎ去れば、頭の中がひどくぼんやりして。そんなことを繰り返していたら、失った夫のことも、勇三さんのことも、全てが夢か幻のようで、どれだけ自分が執着していたかたっぷりと思い知らされたわ。そうしたら不思議なものね、勇三さんを轢いてしまった息子のことも自然と受け入れられるようになってきたの。」

頼子という肉体から、余計なものがそぎ落とされ、何物にも染まらない、研ぎ澄まされた雰囲気と言葉を紡ぐ頼子からひしひしと感じられる。泣いていたのは、そぎ落とされていく過程の中で、それらと別れを告げていたためだったのかもしれない。いくら学を重ねても、すべては誰にもわからない。むしろ、余計なものは捨ててしまったほうが、何かが明瞭になる。そのことに言葉なく気づかせた頼子に、

「そう、ですか。」

と、答えるしかなかった。

しかし、

「貴女は不思議な人ですね。」

私は切り出した。

「私は年をとった人がある意味見くびっていました。年を取った人ならこんな人を愛することなどできないと、先入観から見えていました。でも、貴女は栗生勇三さんを誰よりも強く愛した。そのことだけは紛れもない事実でしょう。結果としてこのようなことになっ

てしまい、難しいことかもしれないし、私みたいな他人よその若造が言うのも不謹慎なのかもしれないけど、好きだと思った気持ちに誇りを持っていいじゃないですか。」

「それが、貴女の答えなの？」

頼子の目が一段と見開かれた。

「え、ええ、そうです。」

頼子の思わぬ返答に一瞬怯んだ。だが私はすぐに切り替え、毅然と答えた。自分の人生の三倍以上を生きてきた人だけど、私は私の人生を頼子にぶつけた。

「いつだって憂き世だ。」

「この世は地獄だ。」

「この世界は穢れている。」

私も何度そのことを嘆いたか、わからないほどだ。この世は剛健そのものと信じてやまなかった私の心でさえへし折ってしまう。私の場合、自業自得なのかもしれないが、今だって心のどこかではそう感じている。鬱の痛みは今だって残っている。それでも、

私達はこの世界の生き物だ。

「ありがとう、あなたは強いよね。この先いろんなことがあるかもしれないけど、あなたならどんなことでもきつと、きつと大丈夫よ。」

ようやく見せた頼子の笑顔。その顔は無邪気で、穢れ一つ知らない少女のようだった。私は頼子に、人生の先輩としての一面と無垢な少女の面影を見た。

退院後、頼子は山科の寺で出家したという。頼子は今、山科の里で静かに第二の人生を踏み出した。私は知らなかったが、入院中からそのお寺の経典を熱心に読んでいたらしい。あの人の姿は今ももう見えないけど、それだけで私は随分と心穏やかになっているこ

とに気がついた。千年の昔、きつと浮舟もあの人と同じ風景を見たのかもしれない。

運命と言う名の激流に翻弄され、私は宇治の早瀬に思いを捧げた。宇治の早瀬の先に広がっていた仏の世界で、わたくしはしめやかに生きています。

書き出した、最初の一行。苦に惑う我らに救いを。新たな世界へ繋がる川よ、今ここに。私は空を見上げた。冷たい空気は今日も宇治川に冴え渡る。

## 浮舟其の四（後書き）

皆さんこんにちは。2008年一作目です。

私は歴史が好きで、しかも今年は『源氏物語』千年紀と言ったことで、インスパイア小説を書きました。  
皆さんの感想、お待ちしております。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4836d/>

---

史文語～あやぶみがたり～平安編～

2009年3月24日10時31分発行